



ユウキは毎朝、心の森への扉を開けるのが辛くなっていました。楽しいはずの場所が、いつのまにか沈んだ霧に包まれて休み時間は息が詰まるよう。心に小さな痛みを感じながら、それでも扉の前で立ち止まりました。



休み時間の森は、ユウキにとって迷子になりやすい場所でした。仲間たちは不思議な光の輪を自由に飛び回っているけど、ユウキはどこに行けばいいかわからず、心がざわついてしまいます。鳥たちの笑い声も遠く感じました。



ある朝、ユウキは胸の奥に静かな痛みを感じました。それはまるで、小さなしずくが心の森を滴り落ちるよう。動きたくても体が言うことをきかず、森のそばから離れられませんでした。静かなさみしさに包まれます。



森の霧が濃くなり、ユウキは居場所を失いかけていました。だれも自分のしずくの声を聞いてくれないので不安になり、涙がぽたぽたとしづくとなって落ちます。けれど、その小さなしづくは彼の心の声そのものでした。



ふと、ユウキの前にしづくの精が現れました。彼は言いました。「そのしづくは、弱さじゃなくて未来の強さの種だよ。」ユウキの顔にわずかに希望の光が差し込み、小さな手がしづくをそっと掬い上げました。



ユウキはしづくの精に導かれ、心の森の奥へ進みました。霧の中にあった小さな光がひとつ、またひとつと増えてゆき、やがて森全体をほんのり照らし始めました。彼の中の戸惑いが、一歩ずつ希望へと変わります。



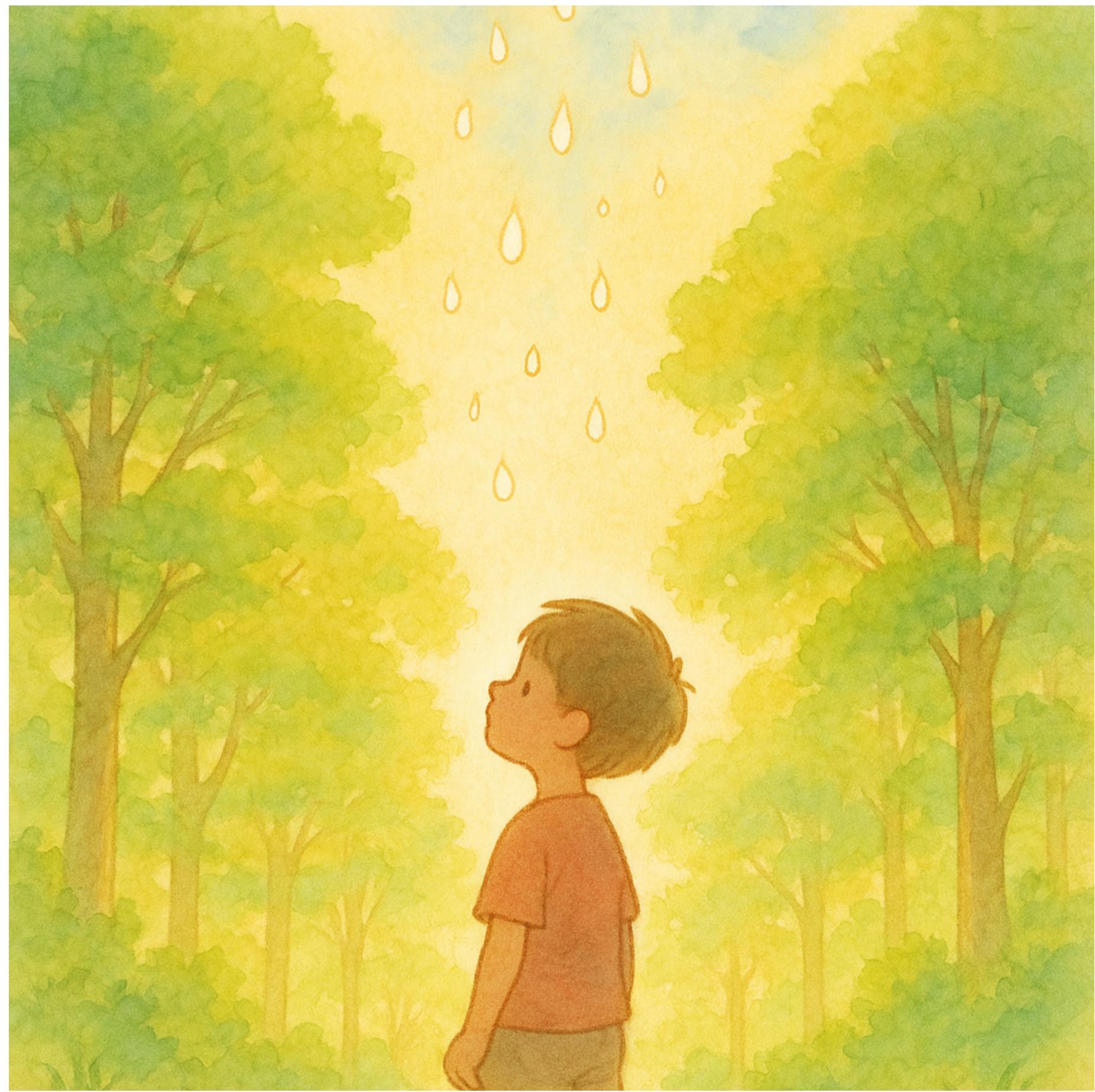
光がもたらしたあたたかさに包まれて、ユウキは迷っていた場所に新しい道を見つけました。その道は、彼の心の小さな痛みを強さに変える道。彼の足はゆっくりだけれど確かに一步踏み出します。



夜になり、ユウキはそっと心のしずくを抱きしめました。それはもう悲しみではなく、勇気の光。小さな光が集まって大きな輝きとなり、未来への小さな光のしずくになりました。



翌朝、ユウキは新しい決意を胸に森の扉をくぐりました。まだ少し不安はあったけれど、彼はもう一人じゃない。心に灯った光のしづくが彼の背中をそっと押し、歩き出す力になりました。



ユウキの光のしづくは、やがて広がる  
大きな森の中で強い光となりました。  
彼の弱さは、勇気とつながり、悩むす  
べての子どもたちに希望を届ける輝き  
となったのです。